

Q. 私はいつも正論を言っているのに、いつも人とぶつかってしまいます。正論を言う私が間違っているのでしょうか。

A. 人間関係のコツをお伝えしますね。

人間関係のコツ、または極意は「全肯定」にあり、なのです。

初めに相手を全肯定してから正論（または、言うべき事）を言うのです。試みにやってみたらいいです。

人間関係が劇的に改善に向かいます。

例えば、私の場合、職業柄発達障がいの方の相談にも乗るのですが、中には殺人計画を話してくる人もいます。こんな時ですら、私は彼の言う事を全肯定します。「そりゃそうだよ。お前の気持ち分かるよ。」と、その後で言うべきことを言います。「先生、お前のこと大好きだから、お前が殺人して、刑務所に入ってしまう会えなくなったら寂しいな」「それに、本当はお前優しいヤツだから、本心では殺人なんてしたくないんだろ」「ただバカにされて悔しいだけなんだろ。先生が、その人の間に入って話すから少し待ってくれないか」と話すと、相手はよく私の注意を聞いてくれます。

しかし、私もついうっかりして、はじめから金八先生のような正論を言って、相手の言う事を否定から入ってしまった事がありますが、この時は、その人が激怒してしまっ、大変でした。

そうになったら、こっちに非がなくてもただ平謝りするだけです。それからまた、全肯定して立て直します。

多くの教育熱心な先生や親御さんが、この事で苦しんでいます。はじめに「全肯定」あり、これは大学でも教えてくれない事なので、いい先生や親御さんほど全力で金八先生のようにぶつかっていき、お互いの関係が壊れ、私のところに相談に来る先生や親御さんも多いのです。

みんな、この簡単なコツをお伝えすると、劇的に改善してゆきます。

この全肯定のコツは子供に対しても、または伴侶や友人、部下、上司に対しても共通します。基本、この全肯定のコツを自分ルールにして生活したらよいと思います。基本、というのは、「ねばならない」ではないという事を言い

たいのですね。全ては選択だからです。

■参考—もうひとつの私の例

仕事で、相手が勘違いしてクレームを言ってきた時でも、私は全肯定です。「そりゃあそうですよ。おっしゃる通りです。深く反省します」と、相手を全肯定してから「それはこういう事だったのです」とか、言うべきことを言うと、相手は実に素直に私の話を聞いてくれます。そしてこのことがきっかけになり、逆にその人との仲がより深まったりすることもよくあります。相手が言う事が間違っていたとして、私が論理で相手を言い負かしたとしても、びっくりする事に、相手には、私が伝えたことは何も残っていません。残っているのは恨みとか怒りとかです。

初めから正論を言って相手の考え方を否定するという事が、こんなにも非生産的だということに気づいたら、他の選択をした方が良いじゃない、というお話でした。

※人は認められたい、または、愛されたい、という生き物です。

全肯定は、愛なのです。

「うん、分かるよ。」と、相手の気持ちや言っていることを受け止める事によって、相手は素直になるのです。また自分も、相手を始めに受け入れる事によって、素直になれるのです。

そしたら、素直と素直の話し合いとなるので、よいベクトルになるのです。全肯定のコツの内訳でした。

■参考

子どもを叱る時や部下を叱るときなどにも応用できます。

相手の気持ちを肯定するところから入り、その後、その行為についてだけ注意してあげるのです。または、優しく教えてあげるのです。例えば、子供が私との約束を破り、ゲームを約束の時間以上していた場合。

「お前のその気持ちはよく分かるよ。そのゲーム楽しいもんな。」

「しかし、お前、お父さんとの約束破ったよな。約束通り、明日一日ゲームなしだからね。」とかね。

なので子供にゲームや携帯とかを買ってあげる時には、約束をしてから買ってあげると良いですよ。